

研究ノート

東京のフランケンシュタイン：あるオーストリア＝
ハンガリー外交官の東京駐在（1911–13年）（1）

島田昌幸

1. はじめに

ゲオルク・フランケンシュタイン男爵（Georg Albert Reichsfreiherr von und zu Franckenstein: 1878–1953）はオーストリア＝ハンガリー帝国末期と戦間期の新生オーストリア共和国においてその外交の一端を担い、第1次大戦敗戦による帝国の壊滅（1918年）と独逸合邦（Anschluß: 1938年）による共和国の消滅という2度の祖国喪失を経験した外交官であった。オーストリア＝ハンガリー外交史研究において、フランケンシュタインはボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合（1908年）を断行したエーレンタール外相（Alois Freiherr (Graf: 1909～) Lexa von Aehrenthal）の弟子の1人として知られている¹。また戦間期外交史研究においては、彼は18年間にわたってオーストリアの駐英公使を務め、祖国喪失後は英国籍を取得して“Sir George Franckenstein”となってMI6（英国情報部）に入り、祖国の復活のために尽力した人物として知られている²。彼の回顧録は英語版³が1939年に出版され、昨年（2005年）になってやっとその独語版⁴が出版された。英語版の表紙裏に「オーストリアの復活に捧ぐ」と記されていることから分かるように、独逸合邦の翌年に出版されたこの回顧録はフランケンシュタインの祖国オーストリア共和国そしてオーストリア＝ハンガリー帝国に対するオマージュであり、祖国再建への決意表明であった。

¹John Leslie, “Österreich-Ungarn vor dem Kriegsausbruch: Der Ballhausplatz in Wien im Juli 1914 aus der Sicht eines österreichisch-ungarischen Diplomaten,” Ralph Melville et. al. (eds.), *Deutschland und Europa in der Neuzeit: Festschrift für Karl Otmar Freiherr von Aretin zum 65. Geburtstag* (Wiesbaden: Franz Steiner, 1988), pp. 662–663. (本稿の脚注はできるだけ英語表記に統一してある。eg. S.→p. Wien→Vienna)

²第2次大戦中のフランケンシュタインによるオーストリア復活のための工作については、とりえず以下を参照のこと。Gerald Steinacher, “‘Passive grumbling, rather than resisting’: The ‘Special Operations Executive’ (SOE) in Austria 1940–45,” *eForum Zeit Geschichte* 3/4 (2001), http://www.eforum-zeitgeschichte.at/3_01a4.html (アクセス日: 2003年1月), 島田昌幸「『オーストリアに関する宣言』と英米の戦後構想1941–43」『慶應義塾高等学校紀要』第34号（2003年）, 33–46頁。

³Sir George Franckenstein, *Facts and Features of My Life* (London: Cassel, 1939).

⁴Georg von Franckenstein, *Zwischen Wien und London: Erinnerungen eines österreichischen Diplomaten* (Graz: Leopold Stocker, 2005).当然、英独語両版とも1939年以降のフランケンシュタインの活動には触れられていない。そこで彼の生涯を描くためには例えば以下のような文献で補足する必要がある。Sir George Franckenstein, “Austria: Past and Present,” *Contemporary Review*, Vol. 179 (May. 1951), pp. 266–275.

フランケンシュタインは臨時代理大使（Geschäftsträger）として1911年6月から1913年1月にかけての約1年半を東京で過ごした。オーストリア＝ハンガリー外交史の観点からすれば、彼がこの時期に、どのような経緯で、何の目的で東京に派遣され、どのような成果をおさめたのか、という点が興味深い。筆者はこれまで第1次大戦前のオーストリア＝ハンガリーの対東アジア政策について調べてきたが⁵、彼の東京赴任は、まさにオーストリアの対東アジア政策が本格始動した時期と重なっている。1911年から1913年にかけてのオーストリア＝ハンガリーの東アジアにおける外交課題は対中国借款事業への進出と日本との通商条約改正であった。フランケンシュタインは直接当事者としてこれらに関わっていくことになる。また文化史的な視点からも彼の東京時代は興味深い素材かもしれない。彼はギムナジウム時代から、ホフマンスタール（Hugo von Hofmannsthal: 1874–1929）やアンドリアン（Leopold Freiherr von Andrian zu Werburg: 1875–1951）ら20世紀初頭のオーストリア文学を背負った者たちと親しく交わり、自身も文学や音楽など芸術に造詣が深かった。そうした彼が本省宛の報告書や回顧録の中で、当時の明治末期から大正初期の日本をどのように描写したのだろうか。

このようにフランケンシュタインは外交史だけでなく文化史（文学史）の観点からも興味深い人間と筆者には思われるのだが、彼についての研究はあまり目にするとはなく⁶。ましてや彼の東京駐在時代に焦点をあてたものは見当たらない。そもそも日本に駐在したオーストリア＝ハンガリー外交官に関する研究自体が、ボン大学のペーター・パンツァー教授の『日本オーストリア関係史』（創造社、1984年）以外見当たらないのが現状である。このことは例えば英仏独の駐日外交使節に関する基礎的研究が調っているのと対照的である⁷。そこで筆者は名門貴族出身、社交的で芸術に精通したフランケンシュタインを典型的なオーストリア＝ハンガリー外交官の1人と位置付け、東京駐在時代を中心に、帝国期の彼の歩みを描いてみたいと思う。本稿では彼が東京に赴任するまでの過程（1878–1911年）を、回顧録、ウィーンの帝室・宮廷・国家文書館（Vienna: Haus-, Hof-, und Staatsarchiv）所蔵のオーストリア＝ハンガリー外務省史料や飯倉の外務省外交史料館所蔵

⁵ 島田昌幸「オーストリア＝ハンガリーの『六国借款団』加入問題（1912）」『法学政治学論究』第60号（2004年）、357–392頁、同「オーストリア＝ハンガリー外交における日本の位置付け（1908–1909）」『法学政治学論究』第62号（2004年）、199–232頁。

⁶ 独逸合邦後のオーストリアからの亡命者についての研究、例えば Helene Maimann, *Politik im Wartesaal: Österreichische Exilpolitik in Grossbritannien 1938 bis 1945* (Vienna: Böhlau, 1975) や 連合国の戦後構想やオーストリア占領に関する研究、例えば Alice Hills, *Britain and the Occupation of Austria, 1943–45* (London: Macmillan, 2000) には、フランケンシュタインの名を見出せる。

⁷ イギリスの外交官については、イアン・ニッシュ編（日英文化交流研究会訳）『英国と日本：日英交流人物列伝』（博文館新社、2002年）を参照のこと。またフランスの外交官では詩人としても著名なポール・クローデル（Paul Claudel）がおり、フランス外交史の濱口教授が次のような研究が発表している。濱口學「駐日フランス大使ポール・クローデルのベルリン赴任問題の背景—植民地開発構想と戦後経済復興—」『国際法外交雑誌』第103巻4号（2005年）。ドイツについては、Hans Schwalbe and Heinrich Seemann (eds.), *Deutsche Botschafter in Japan 1860–1973* (Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1974) 参照。

の『外務省記録』を紐解きながら描く。そして次号以降で彼の東京での主たる任務（外交官としての活動）と、彼の描いた日本像の一端を紹介したいと思う。

2. 東京に至る道程（1878-1911年）⁸

本章ではゲオルク・フランケンシュタインという人物が東京に赴任するまでの過程を、主として回顧録に基づいて紹介したい。

(1) フランケンシュタイン家⁹

フランケンシュタインというと「怪物」をイメージしがちだが、同家はドイツの旧家で、多くの政治家や外交官を輩出している。フランケンシュタインという家名が記されたもっとも古い史料は、西暦884年にアルボガスト・フランケンシュタイン（Arbogast zu Franckenstein）が、ヴォルムス（Worms）の馬上試合で第2位になった記録だという。そして1806年に神聖ローマ帝国が消滅するまで、フランケンシュタイン家は帝国直轄（reichsunmittelbar）の地位を保持した。同家は元々ダルムシュタット近郊に居を構え¹⁰、婚姻により周辺に広大な領土を獲得したが、1662年にはこの所領を売却してバイエルンのウルシュタット（Ullstadt）に移り住んだ。以来、同地がフランケンシュタイン家の本拠地になっている¹¹。1670年には同家に帝国男爵位（Reichsfreiherrstand）が与えられ、「フランケンシュタイン男爵家（Reichsfreiherr von und zu Franckenstein）」となった。なおフランケンシュタイン家でもっとも有名なのは、ビスマルク期のドイツ帝国議会副議長で中央党党首、バイエルン王国上院議員だったゲオルク＝アルボガスト・フランケンシュタイン男爵（Georg Arbogast Reichsfreiherr von und zu Franckenstein: 1825-1890）である¹²。

⁸フランケンシュタインの外交官としての経歴の基本情報は次の史料による。Jahrbuch des k. u. k. auswärtigen Dienstes 1914 (Vienna: K. K. Hof- und Staatsdruckerei, 1914), p. 276.

⁹本節は Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 33-38; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 51-55による。

¹⁰現在もフランケンシュタイン城（Burg Franckenstein）として観光名所となっている。Cf. <http://www.burg-franckenstein.de/>（アクセス日：2006年2月28日）。

¹¹ウルシュタットにもフランケンシュタイン城（Schloss Franckenstein）が存在する。<http://www.users.odn.de/~odn07240/html/ullstadt.html>（アクセス日：2006年2月28日）。

¹²フランケンシュタイン家は、元々のドイツ西部に本拠を構えていた宗教改革の時代にもプロテスタントへの改宗を拒みつづけた熱心なカトリック教徒の家系であった。19世紀後半の当主ゲオルク＝アルボガストはオーストリアを排除したプロイセン主導のドイツ統一、そしてバイエルン王国の「第2帝国」編入に反対し、1871年以降は中央党の代表的政治家として帝国議会でも活躍した。彼はドイツ史ではいわゆる「フランケンシュタイン条項（Franckenstein'sche Klausel）」で知られた人物である。なお最近ゲオルク＝アルボガストの伝記が出版された。Karl Freiherr von Aretin, *Franckenstein: Eine politische Karriere zwischen Bismarck und Ludwig II* (Stuttgart: Klett-Cotta, 2003).

(2) ゲオルク・フランケンシュタインの周辺 ～家族・友人～

このゲオルク＝アルボガストの甥にあたるのが、本稿で扱うゲオルクである。彼は1878年3月18日、オーストリア＝ハンガリー外交官だった父カール (Karl Reichsfreiherr von und zu Franckenstein: 1831–1898)¹³の任地ザクセン王国の首都ドレスデンに生まれた¹⁴。ゲオルクには兄と姉がおり、兄クレメンス (Clemens Reichsfreiherr von und zu Franckenstein: 1875–1942, 愛称はクレ Cle) は作曲家¹⁵で、バイエルン王立歌劇場 (後のバイエルン州立歌劇場) の総監督/総支配人 (Genealdirektor/Generalintendant) を1912年から1934年 (1918–24年を除く) の長きにわたり務めた。母エルマ (Elma: 1841–1884)¹⁶ はゲオルクが6歳のときに亡くなっており、4歳年上の姉レオポルディーネ (Leopoldine, 愛称はポルディ Poldy) が半ば母代わりとしてゲオルクを支え続けた。

フランケンシュタイン家の子供たちは父の外交官引退に伴い、ウィーンで教育を受けることになった。彼らの住居はウィーンの環状道路リング (Ring) 内、つまりウィーン1区のアム・ホーフ (Am Hof) にあった。そこからフライウンク (Freyung) という通りを歩いてすぐのところにはショッテン教会がある。その奥にフランケンシュタインが通学したショッテン・ギムナジウム (Schottengymnasium)¹⁷ がある。このギムナジウムはカトリック、ベネディクト派のショッテン修道院が運営している。ショッテ (Schotte) とはドイツ語でスコットランド人のことであるが、12世紀にオーストリアを支配していたバーベンブルク家のハインリヒ2世 (Heinrich Jasomirgott) がレーゲンスブルクから、アイルランド (当時は 'Scotia' minoris と呼ばれていた) 人修道士を呼び寄せて修道院を建設したことに由来

¹³フランケンシュタイン家の三男であった父カールは、ハプスブルク家に外交官として仕え、ベルリン、ベルン、ロンドン、コペンハーゲン、ワシントン、ペテルブルクなどで勤務した。だが外相カールノーキ伯爵 (Gustav Sigmund Graf Kálnoky, Freiherr von Kőrospatak: 1832–1898) と折り合いが悪くなり、1889年に辞職。その後はオーストリア帝国議会の終身上院議員を務め、さらにオーストリアとハンガリーの共通業務を審議する代議会 (Delegation) のメンバーともなった。ちなみに1867年のアウスグライヒ (Ausgleich) 以降、元神聖ローマ帝国のハプスブルク領である「オーストリア帝国」は国際主体としては「オーストリア＝ハンガリー」へと改組され、ドイツ人がイニシアティブを握るいわゆるオーストリア (ボヘミアやポーランドも含む) とは別箇に、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世を国王とする「ハンガリー王国 (ハンガリー王国議会有する)」が成立した。当時ハンガリー王国以外の地域には「帝国議会で代表される諸王国と諸領邦 (Im Reichsrat vertretenen Königreiche und Länder)」という名称しかなかったが、ここではハンガリー王国以外の「オーストリア＝ハンガリー」に含まれる諸国・諸地域を便宜的に「オーストリア帝国」とした。

¹⁴Franckenstein, *Facts and Features*, p. 1; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 25. ちなみに1878年は吉田茂の生年でもある。

¹⁵クレメンスの作品の中で実際に耳にすることができるものにはドイツの指揮者ハンス・クナッパーツブッシュ (Hans Knappertsbusch: 1888–1965) が戦前にSP用に録音したものがある。「マイアベアの主題による変奏曲」クナッパーツブッシュ/ベルリン国立歌劇場管弦楽団 (1924年録音, Preiser 90389). Cf. <http://www.trovar.com/kna.html> (アクセス日: 2006年3月14日)。ちなみにクナッパーツブッシュのザルツブルク音楽祭デビュー (1929年) でもクレメンスの「舞踏組曲」が取り上げられた。 <http://www.andante.com/article/article.cfm?id=17639&highlight=1&highlightterms=&1stKeywords=> (アクセス日: 2006年3月14日)

¹⁶母エルマはピアノを好み、これが息子2人に音楽の素養を与えることになった。Franckenstein, *Facts and Features*, p. 2; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 26.

する¹⁸。この修道院は18世紀に貴族子弟のための学校を開設し、1807年にこれがあらゆる階級に開かれたギムナジウム（大学進学を目指すものための中等教育を担う学校）に改組された。当時のギムナジウムは小学校の5年間を終えた者が通う8年課程で、学生たちは主としてギリシャ語、ラテン語、英仏伊語の5ヶ国語を習得し、物理学や幾何学なども学んだ。ゲオルクの回顧録にはショッテン・ギムナジウムでの生活について若干の記述がある。

教員の中には名の知られた印象深い人々も多く、彼らは研究者として優れた人物たちであった。同時に彼らは最善を尽くして教えてくれるので、学生にも多くを求めた。この学校に通学し卒業していった者は（中略）将来のキャリアに備えるための、価値ある手堅い知的な土台を与えられたのである。この学校には多くの逸話が残っている。フェルナー神父が「お前は名前についているフォン（von）に値しない」と兄のクレメンスを叱ったとき、兄は機転を利かせてこう答えた。「（フォンがなくなっても）まだツー（zu）が残っていますから。」[*Franckenstein, Facts and Features*, p. 9; *Idem, Zwischen Wien und London*, p. 30.]

このようにフランケンシュタインはギムナジウムを中流から上流階級の子弟の知的な土台を形成する場として、ほのぼのと描いている。一方で同世代の作家シュテファン・ツヴァイク（Stephan Zweig: 1881–1942）は自伝『昨日の世界』の中で、自分が通ったウィーン4区のマキシミアン・ギムナジウム（Maximiliansgymnasium）での生活を次のように描いた。

私の全学校生活は、正直に言えば、絶えざる退屈きわまる倦怠以外の何ものでもなく、それは、この臼を踏むようなこの単調な仕事から逃れたいという焦立ちによって、1年1年と高まっていった。われわれの最も美しく、最も自由であるべき生涯の一時期を徹底的に面白くないものにした、あの単調で無慈悲で活気のない学校作業のうちにあって、私は1度でも「愉快」であったり「幸福」であったりした事実を、思い出すことはできない。（中略）そして私が学校に感謝せねば

¹⁷同校はウィーンの代表的なギムナジウムであり、オーストリア史を彩る著名人を輩出してきた。政治ではオーストリア＝ハンガリー最後の皇帝カール1世、ウィーン市長アドラー（Viktor Adler）、オーストリア首相シュッセル（Dr. Wolfgang Schüssel）、芸術では作曲家ヨハン・シュトラウス（Johann Strauss）、劇作家のネストロイ（Johann Nestroy）、小説家のアンドリアン、現在のウィーン・フィルの楽長ヘルスベルク（Clemens Hellsberg）、学術ではオーストリア学派経済学のベーム＝バヴェルク（Eugen von Böhm-Bawerk）や動物行動学者ローレンツ（Konrad Lorenz）等々、錚々たる卒業生を擁する。Cf. <http://www.schottengymnasium.at/>（アクセス日：2006年3月1日）。

¹⁸*Franckenstein, Facts and Features*, p. 8. ショッテン教会の由来については以下のウェブサイトを参照のこと。<http://members.aon.at/hwien/meisho/kirche/schotten.html>（アクセス日：2006年3月1日）。

ならない唯一の、本当に心躍る幸福の瞬間となったのは、私とその扉を永遠に私の背後に閉じた日であった。(中略) 学校についての不満は、私の個人的な見地というようなものではけっしてなかった。われわれの最良の関心や意図がこの踏臼のなかで阻害され、倦怠させられ、圧迫されるということを、不満をもって感じなかったような同輩を、私は思い起こすことができない。(原田義人訳『昨日の世界(1)』(みすず書房, 1999年), 54-55, 59頁.)

このようにツヴァイクのギムナジウム描写は、牧歌的なフランケンシュタインとは対照的に暗く厳しいものだった。だが、おそらくこの2人のギムナジウム像は矛盾するものではない。フランケンシュタインが通ったショッテン・ギムナジウムの学校生活も、ツヴァイクに描かせれば、同様のものになったかもしれない。一般論としていえるのは、ツヴァイクのようなギムナジウム生活に対する幻滅や諦めは、学校外の世界に対する憧れにつながっていったということである。当時の学生たちの文学や音楽に対する渴望の背景には、綺羅星のような多くの優れた芸術家たちの存在に加えて、ギムナジウム生活への閉塞感があったのだろう。「校外には、さまざまな刺激にあふれた町、劇場や博物館や大学や音楽のある町があり、そこでは毎日がちがった驚きをもたら¹⁹⁾した。そして「われわれの堰き止められた知識欲、学校では決して糧を見出さない、精神的、芸術的、享乐的な好奇心は情熱をもって学校の外に起こるあらゆることに向って没頭した²⁰⁾」のである。ギムナジウムの学生たちは芸術、思想やスポーツ²¹⁾の魅力に「麻疹や猩紅熱のように²²⁾」感染していった。

そうしたギムナジウムの学生たちにとって「あらゆる新しいものに対する最良の教養の場所はずねにカフェであった²³⁾。」ウィーン1区、新王宮の裏門の前にあるカフェ「グリーンシュタイドル (Grinsteidl)」には、当時のウィーン文学界の新星たちがこぞって集い、1つの文化の中心をなしていた。そこではコーヒー1杯を注文するだけで、ヨーロッパ各国の新聞に一通り目を通し、刺激的な者たちとの会話・議論を楽しみ、作家たちの草稿を回し読んで、いわば文化の最前線に参加することができた。このカフェを根城としていたのが、ヘルマン・バール (Hermann Bahr: 1863-1934) やアルトゥール・シュニッツラー (Arthur Schnitzler: 1862-1931) を中心とする文学グループ「若きウィーン (Jung Wien)²⁴⁾」の面々であった。そして1890年代の「若きウィーン」のアイドル的存在はフーゲー・フォ

¹⁹⁾シュテファン・ツヴァイク (原田義人訳)『昨日の世界(1)』(みすず書房, 1999年), 65頁。

²⁰⁾同上。

²¹⁾ツヴァイクによれば、当時のギムナジウムでは「スポーツと散歩にほとんど全く余地が残されな」いほど、通常授業が詰め込まれていた。そのためスポーツに対する憧れも高まっていた。(同上書, 54頁.)

²²⁾同上書, 66頁。

²³⁾同上書, 68頁。

²⁴⁾19世紀末のウィーンにおける「若きウィーン」の社会的な位置付けについては、カール・ショースキー『世紀末ウィーン: 政治と文化』(岩波書店, 1983年) 第6章を参照のこと。

ン・ホフマンスタール²⁵であった。彼は10代半ばから詩や戯曲を発表し、そのいずれもがパウルやシュニツラーらに高く評価され、1890年（16歳）の秋からグリーンシュタイドルの常連となっていた²⁶。そしてフランケンシュタインも「グリーンシュタイドルに集う主要人物たちより年下で、ただ話を聴いているだけだったが、彼らのテーブルに同席²⁷」していた。というのもホフマンスタールこそ、ゲオルク・フランケンシュタインの親友だったからである²⁸。

ホフマンスタールはゲオルクより4歳年長であったが、この年下の友人を殊のほか大切にした。フランケンシュタインの回顧録に収められているホフマンスタールの手紙には、次のような一節があるほどである。

たしかに僕たちが知り合えたのは、ポルディ（ゲオルクの姉）やクレ（ゲオルクの兄）と僕が友達だったからだけど、最初に出会ったときから、君は僕にとって興味深く大切な存在だし、君は気付なかったかもしれないけど、僕はずっと君の関心をひきつけようとしてきた。君にかかわることは何でも、君に起こったこと全て、そして君の中で起こったこと全てが、いつも僕に影響を与える。あたかも君が僕の弟であるかのように。 [Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 20-1; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 38.]

このようにホフマンスタールはフランケンシュタインを弟のように可愛がっていた。2人の友人関係はゲオルクが外交官になってからも続き、頻繁に手紙をやりとりしたほか、ゲオルクはその休日をウィーン郊外ロダウン（Rodaun）のホフマンスタール邸や、ザルツカンマーグートのアルトアウスゼー（Alt Aussee）にあるフランケンシュタイン家の別荘でたびたびこの親友と過ごしたのであった²⁹。またゲオルクは、短編『認識の園³⁰』で「若きウィーン」を魅了して文壇の寵児となり、のちに外交官として活躍したレオポルト・アンドリアン男爵³¹や若くして死んだ海軍士官エドガー・カルク（Edgar Freiherr Karg von Bebenburg: 1875-1905）といったホフマンスタールの親友たちとも親しい関係を築いた。

²⁵現在、戯曲「イェダーマン」やリヒャルト・シュトラウスの歌劇「薔薇の騎士」や「エレクトラ」の台本作者としてしか一般には知られていないホフマンスタールだが、1890年代のウィーンでは、彼は「神童」であり、天才的な詩人・作家として認められていた。当時のウィーン文壇でのホフマンスタール評価については、ツヴァイク『昨日の世界（1）』、78-94頁を参照のこと。

²⁶『フーゴー・フォン・ホフマンスタール選集（4）』（河出書房、1973年）、467頁。

²⁷Franckenstein, *Facts and Features*, p. 18; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 37.

²⁸「全ての友人の中で、私にとってもっとも価値があり、重要だったのがフーゴー・フォン・ホフマンスタールである。その友人関係は彼の死まで続いた。」Franckenstein, *Facts and Features*, p. 19, Cf. Franckenstein, "Nachruf für Hofmannsthal, Meinen besten Freund," Helmut A. Fichtner, *Hugo von Hofmannsthal: Die Gestalt des Dichters im Spiegel der Freunde* (Vienna: Humboldt-Vlg, 1949), pp. 286-290.

²⁹Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 19-20; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 37-38.

(3) アメリカ ～試用期間～

ゲオルクはショッテン・ギムナジウム卒業後、ウィーン大学法学部に進学し、そこではオーストリア学派経済学の大家カール・メンガー (Carl Menger: 1840–1921)³²にも学んだ。大学卒業後は第6竜騎兵師団で兵役を済ませ (1897–?年)、そのあとイタリア、モロッコ、ジブラルタル、フランス、イギリスへの長期旅行を経験した。特にイギリスでは1938年以降の亡命生活につながる人脈を開拓することになった³³。

彼の就職先は父と同じく外務省であった³⁴。当時、外交は軍事・財政と共にオーストリア帝国とハンガリー王国の共通業務 (gemeinsame Angelegenheiten) であり、皇帝直属の外務大臣 (宮内大臣兼務) が率いる外務省 (バルハウスプラッツ: Ballhausplatz) がオーストリア=ハンガリーの国際社会での舵取りを担っていた³⁵。ゲオルクは辛くも仮採用試

³⁰Leopold Andrian, *Der Garten der Erkenntnis* (Zurich: Manesse, 1990). 邦訳は「認識の園 (菊本薫訳)」「みすず」44巻2, 3号 (2002年2, 3月)。作家としてのアンドリアンについては様々な研究が出ている。先ずは以下を参照のこと。Jens Rieckmann, “Leopold von Andrian,” James Hardin and Donald Daviau (eds.), *Dictionary of Literary Biography*, vol. 81 (Detroit: Gale Research, 1989), pp. 11–17; 岡光一浩「L アンドリアンと小説『認識の園』」『独仏文学 (山口大学)』第15号 (1993年8月), 43–59頁; 同「ナルシスの夢—ウィーン世紀末文学の典型としての『認識の園』—」松村國隆他編『中欧—その変奏』(鳥影社, 1998年), 229–251頁。

³¹外交官としてのアンドリアンについてはブリストル大学のレスリー (故人) の研究がある。アンドリアンもフランケンシュタイン同様、積極外交を推進したエーレンタール外相の信奉者であった。レスリーはアンドリアンが第1次大戦直後に書いた重要な手記を公刊している。それは次のように始まっている。「我々が戦争を始めたのだ。ドイツでも協商諸国でもない。そのことは分かっている。(Leslie, “Österreich-Ungarn vor dem Kriegsausbruch,” p. 675.)」かつて歴史学界の一大争点だった第1次大戦起源論研究は、欧米では今も爾々と続けられている。レスリー論文もこうした研究の成果である。かつての「ドイツ有責論」をめぐる「フィッシャー論争」の蔭に隠れてしまったオーストリア=ハンガリーの開戦過程について研究は着々と進んでおり、オーストリアがロシアとの戦争について明確な対策を持たぬまま、セルビアに対する開戦を決断したことが明かにされている。Cf. Fritz Fellner, “Die Mission Hoyos,” Wilhelm Alff (ed.), *Deutschlands Sonderung von Europa 1862–1945* (Frankfurt a. M.; Peter Lang, 1984), pp. 283–303; Idem, “Austria-Hungary,” Keith Wilson (ed.), *Decisions for War, 1914* (London: UCL Press, 1995), pp. 9–26; Graydon Tunstall, Jr., “Austria-Hungary,” Richard Hamilton and Holger Herwig (eds.), *The Origins of World War I* (Cambridge: Cambridge U. P., 2003), pp. 112–149.

³²Franckenstein, *Facts and Features*, p. 10; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 31.

³³Franckenstein, *Facts and Features*, p. 24; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 40–41.

³⁴ゲオルクは就職先の外務省について次のように記している。「私は卓越した団結心 (esprit de corps) を誇る外務省への入省を誇らしく思っていた。外務省の人員は (帝国) 各地のドイツ人、ハンガリー人、ポーランド人、ルーテン (ウクライナ) 人、ルーマニア人、チェコ人、クロアチア人、イタリア人そしてセルビア人から構成されていたが、その職務は一致団結した愛国心によって支えられていた。私は外務官僚が帝国全体の利害よりも自身の民族の利害を優先した事例を一度も見ることがない。」Franckenstein, *Facts and Features*, p. 25; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 43.

³⁵オーストリア=ハンガリー外務省の機構については以下の文献を参照のこと。William Godsey, Jr., *Aristocratic Redoubt: The Austro-Hungarian Foreign Office on the Eve of the First World War* (West Lafayette: Purdue U. P., 1998); Helmut Rumpel, “The Foreign Ministry of Austria and Austria-Hungary 1848–1918,” Zara Steiner (ed.), *Times Survey of Foreign Ministries of the World* (London: Times Books, 1982), pp. 49–49; Idem, “Die rechtlich-organisatorischen und sozialen Rahmenbedingungen für die Aussenpolitik der Habsburgermonarchie 1848–1918,” Adam Wandruszka and Peter Urbanitsch (eds.), *Die Habsburgermonarchie 1848–1918* Vol. 6, Part 1 (Vienna: Der österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1989), pp. 1–121.

験に合格して³⁶、約1年の試用期間をワシントンの大統領館で過ごすことになった(1902年1月)。回顧録によれば、彼がワシントンでの研修を希望した理由は、彼がたまたまウィーンでアメリカ出身の美人姉妹を見かけて興味を持ったからであった³⁷。フランケンシュタインは外務次官のリュツォウ伯(Heinrich Graf von Lützow zu Drey- Lützow und Seedorf: 1852-1935)が美しい女性に目がないことをよく知っており、その美人姉妹の1人を伯爵に紹介することで、アメリカ行きを勝ち取ったのである。

彼はアメリカ生活を文字通り満喫した³⁸。多くの友人(特に女性の友人³⁹)を作り、各地を旅して見聞を広めた。この充実した生活の中で、彼の中で彼なりのアメリカ観が育っていった。彼によるとアメリカには「病めるアメリカ」、「競争好きなアメリカ」、「勝ち誇るアメリカ」という3つの側面があるという⁴⁰。「病めるアメリカ」は、大工業都市に象徴されている。煤と埃で汚れ、鋼鉄のハンマーの音がけたたましく響き渡っている部分を「病んでいる」と感じた。「競争好きなアメリカ」とは商業・金融の中心地のことである。摩天楼がそびえ立ち、短気な人たちが乗ったエレベーターがひっきりなしに昇降している姿に、アメリカ人の競争社会志向を嗅ぎ取った。また「勝ち誇るアメリカ」を象徴するのは、裕福な「新貴族層」の別荘が軒を連ねるロードアイランド州のニューポート(New Port)である。そこには贅を尽くした世界があった。また彼はアメリカ人特有の「理想主義とほぼ無制限の利潤追求の混合」に衝撃を受け、彼らが発揮する集中力にも強い感銘を受けたのである⁴¹。

(4) ロシア ～恩師との出会い～

ウィーンに戻った彼を待ち受けていたのが、外交官に正規登用されるための外交官試験であった。回顧録によれば「試験は恐れるにたらず、簡単に合格した⁴²」らしい。1903年5月17日、こうしてフランケンシュタインは無給の外交官補(unbesoldeter Gesandtschafts-attaché)として正式にオーストリア＝ハンガリーの外交官となった。彼の最初の赴任先はロシアのペテルブルクと決まった(同年5月21日)。ただし赴任までの短い間、侍従として宮中に出向している⁴³。

任地ロシアは、当時のオーストリア＝ハンガリーにとってきわめて重要な国際政治上の

³⁶外交官に本採用されるには、約1年の試用期間を経なければならぬ。フランケンシュタインは仮採用試験(Vorprüfung)でフランス語の成績が芳しくなかった。Godsey, Jr., *Aristocratic Redoubt*, pp. 44-5.

³⁷Franckenstein, *Facts and Features*, p. 25; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 43.

³⁸「華やかな万華鏡のような印象、多くの新しい友人たち、若々しく、人気があるというおめでたい自意識、これらが私を夢中にさせた。」Franckenstein, *Facts and Features*, p. 31; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 47.

³⁹Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 26-27; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 44-45.

⁴⁰Franckenstein, *Facts and Features*, p. 30; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 46.

⁴¹Franckenstein, *Facts and Features*, p. 32; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 47.

⁴²Franckenstein, *Facts and Features*, p. 32; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 48.

⁴³Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 32-33; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 50.

パートナーだった。だが1815年以降の両国関係はアンビヴァレントのものであったといえる⁴⁴。両国は19世紀のヨーロッパ国際政治において神聖同盟や三帝同盟に代表される保守主義的な列強を代表し、オスマン帝国の領土保全に代表される現状維持政策を継続することに利害を共有してきた。確かに両国間にはバルカン半島の覇権をめぐる伝統的な対立が存在していたが、外交的な手段で長年抑制されていた。だがドイツ統一を成し遂げたビスマルク (Otto Fürst von Bismarck: 1815–1898) が「正直な仲介者」として欧州国際政治を操縦していた時、奥露関係は困難に直面していた。1885年から始まったブルガリアとセルビアの紛争で、ロシアはブルガリアを、オーストリアはセルビアをそれぞれ支援したため奥露関係は険悪化していたのである⁴⁵。このため第2次三帝同盟 (1881) は締結後、僅か6年でその役割を終えることになった。だがビスマルクはロシアとの絶縁を望まず、独奥同盟 (1879年) に抵触する「再保障条約 (1887)」をロシアと結ぶことで、ロシアとの協調関係を維持した。だが「正直な外交」を志向したビスマルクの後継者たちは、アクロバティックな再保障条約を更新しなかった。こうしてロシアはフランス、そしてイギリスの方を向き始めることになった。国際政治の潮目はビスマルクが恐れていた方向に確実に流れ始めたのである。だが同時にロシア外交の「振り子」は西から東に振れ始めた。ロシアが満州進出を本格化させると、オーストリアとの協調関係復活の可能性が生まれることになった。ロシアとしてはその東隣りの中国東北部への進出に伴い、西隣のバルカン半島についてオーストリアとの間に現状 (status quo) 維持を確約しておく必要があったのである。奥露両国は1897年に奥露協商を、1903年に「ミュルツシュテーク綱領」を、1904年には奥露中立条約を締結して協調関係を再構築していった。ロシアにとっては東アジア進出に伴い、背後を固めておきたいという必要に迫られたオーストリアとの協調関係であった。しかしオーストリアにとってはバルカン半島の現状維持、つまりオスマン帝国の領土保全をロシアと約すことには死活的な重要性があった⁴⁶。ロシアとは違いバルカン半島以外に「勢力圏」に相当するものを持たないオーストリアにとって、同地に対する影響力を保持することは「列強/大国」としての地位 (Großmachtstellung) を辛うじて保つための最後の砦であった。仮にロシアがコンスタンティノープルを占領したり、セルビアやモンテネグロ、ブルガリア、ギリシャといったバルカン諸国がオスマン帝国領を侵食して拡大したり、あるいはバルカン諸国が糾合して大スラヴ民族国家が成立するようなことは、多民族帝国オーストリアとしては絶対に避けなければならぬことであった。仮にそのようなことが現実となれば、帝国内のスラヴ系諸民族が周辺スラヴ諸国に惹きつけられて、その遠心力

⁴⁴ここでの国際政治情勢の描写は主として以下の文献に依拠している。Francis Roy Bridge, *From Sadowa to Sarajevo, the Foreign Policy of Austria-Hungary, 1866–1914* (London: Routledge, 1972); Idem, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers* (New York: Berg, 1990); Barbara Jelavich, *The Habsburg Empire in European Affairs 1814–1918* (Chicago: Rand McNally, 1969).

⁴⁵三帝同盟の不更新と再保障条約締結過程については以下を参照のこと。馬場優「ドイツ外交における独露再保障条約の意義 (1)」『法学雑誌 (大阪市立大学)』第40巻2号 (1994年), 90–119頁。

で帝国が崩壊し、オーストリアは「東方のスイス」に転落しかねなかった。そのためバルカン半島の現状維持、すなわちオスマン帝国がバルカン半島に領有する地域（いわゆる「マケドニア」）を確実に保全することが、オーストリア＝ハンガリーにとっての死活的な利害となったのである。マケドニアを安定化させるためにオーストリアはロシアと共に当地の行政改革をオスマン帝国に求めつけた⁴⁷。このようにオーストリア外交の基本方針はロシアとの協調関係の下でバルカン半島の現状を死守することであった。この意味でオーストリアにとってロシアはもっとも重要なパートナーであった。

しかしながら、問題はロシアがこうしたオーストリア側の事情にどこまで理解を示してくれるか、というところにあった。英リーズ大学のオーストリア＝ハンガリー外交史研究者ブリッジ（Francis Roy Bridge）は、当時のロシアにはパン・スラヴィズム（Pan-Slavism: 汎スラヴ主義）のロシアと「公式の（Official）」ロシアがあったと指摘する⁴⁸。オーストリア側の意図に理解を示したのは、宮中に代表される「公式の」ロシアであった。つまりリアリスティックな国際関係上の必要性から、オーストリアとの協調を求めた勢力である。しかしながら、当時のロシアでは軍、官僚、外交官そして知識人層にパン・スラヴィズムが浸透し、世論もまた汎スラヴ主義を支持していた。彼らはロシアをスラヴ民族の保護者と位置付け、ロシアの外つまりバルカン半島やハプスブルク帝国内のスラヴ民族を「救済する」ために、ロシアは決然と行動すべきだと考えていた。つまりバルカン半島を

⁴⁷オーストリアがロシアとの協調関係を維持しようとした背景には、1896年に第4次地中海協定がイギリスによって更新されなかったこともある。（Cf. Bridge, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers*, pp. 225–227.）つまりこれによりオーストリアはイギリスとの協調関係を保障する枠組みを失ったのである。地中海協定はビスマルクの英伊接近策の産物であり、オスマン帝国の現状維持、領土保全を英伊間で約すものであった。しかしながら、英国は徐々にオスマン帝国の現状維持に関心を失い、ドイツの近東進出を脅威として認識し、植民地に関して仏露との協調関係を求めるようになり地中海協定に価値を見出さなくなっていく。こうしてイギリスとの結びつきを失ったオーストリアは、半ば仕方なしにロシアとの協調関係を求めるようになったのである。このソールズベリー期のイギリス外交の転換については先ず以下の古典的研究を参照のこと。神谷不二「ソールズベリーの東方政策—イギリスの伝統的政策より観たる—（1）（2）」『国家学会雑誌』第51巻6号（1952年）、47～86頁、第52巻4号（1953年）、58～91頁。ちなみに1897年の埃露協商をペテルブルクに向いて締結した外相ゴウホフスキはポーランド貴族であり、短絡的に表現すれば、基本的にロシア嫌いであった。歴史の皮肉である。

⁴⁸「マケドニア」におけるオスマン帝国行政の改革と列強諸国の関与については、以下の文献を参照のこと。Wade D. David, *European Diplomacy in the Near Eastern Question 1906–1909* (Urbana: The University of Illinois Press, 1940); F. R. Bridge, *Great Britain and Austria-Hungary 1906–1914, A Diplomatic History* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1972); Idem, “Relations with Austria-Hungary and Balkan States,” F. H. Hinsley (ed.), *British Policy under Sir Edward Grey* (Cambridge, Cambridge U. P., 1977), pp. 165–177; Idem, “The Habsburg Monarchy and the Ottoman Empire, 1900–1918,” Marian Kent (ed.), *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire* (London: George Allen & Unwin, 1984), pp. 31–51; N. Lange-Akhund, *The Macedonian Question, 1893–1908 from Western Sources* (New York: Boulder, 1998); 島田昌幸「欧州協調におけるエーレンタール初期外交」（慶應義塾大学大学院法学研究科修士論文、2002年3月）。

⁴⁹F. R. Bridge, *1914: The Coming of the First World War* (Second ed.) (London: The Historical Association, 1988), pp. 7–8.

ロシアの指導の下で再編して大スラヴ国家を樹立し、さらにオーストリア＝ハンガリーという「民族の牢獄」にとらわれている同胞を救い出すことがロシアの使命だと考えていたのである。彼らは当然、「敵」であるオーストリアとの協調関係を嫌い、政府の外交政策を批判し続けていた。このようなロシアの二面性は、オーストリアにとって頭痛の種であった。

この時ペテルブルクでオーストリア大使を勤めていたのが、のちに外相に就任するボヘミアのドイツ人貴族アロイス・エーレンタール男爵であった。のちのボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合（1908年）の際に、その強引な手法からヨーロッパ中に悪名をとどろかせることになるこの外交官は、長いロシア駐在経験から外務省内の親露派中心人物として知られ⁴⁹、保守主義者として喫露独による三帝同盟の復活を強く唱えていた人物であった⁵⁰。彼については同時代人や歴史家から様々な評価があるが、少なくとも「前任者とは異なって、政策を状況に適應させるのではなく、決然と自らイニシアティヴをとる⁵¹」人物であり、その口癖は「オーストリアは偉大で力強く独立していなければならない⁵²」であった。

彼の基本的なバルカン政策はバルカン半島をオーストリアとロシアの勢力圏に分割するというものであった⁵³。彼はロシア大使になる前から外相に自説を進言していたが、現状維持派のゴウホフスキ外相（Agenor Graf Gołuchowski von Gołuchowo: 1895–1906外相）や皇帝はこの進言を取り合わなかった⁵⁴。エーレンタールの論理によればオーストリアが国際社会でイニシアティヴを発揮し、バルカン半島で決然とした政策を遂行するためには、ロシアとの妥協が不可欠ということになる⁵⁵。そこで彼は1897年の喫露協商、1903年のミュルツシュテーク綱領、1904年の喫露中立条約等々、両国の接近をもたらすための外交努力を並々ならぬ意欲をもって推進してきた。また熱心な保守主義者であった彼は、1905年のロシアの11月革命を目の当たりにして、ハプスブルク家とロマノフ家そしてホーエンツォレルン家の王朝間の団結こそが、プロレタリアートの抬頭を妨げるために有効であると固く信じていた。このため再三にわたって三帝同盟復活を進言してきたのであった。

他方で、彼はオーストリア＝ハンガリーが国際社会で「列強/大国」として活動するためにふさわしい国制のあり方について、誰よりも真剣に考えた人物でもあった⁵⁶。つまり

⁴⁹Cf. Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 43–45; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 60–62.

⁵⁰エーレンタールの三帝同盟提案については、以下を参照のこと。Bridge, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers*, pp. 244, 257, 265–267, 269–270; Solomon Wank, “Varieties of Political Despair; Three Exchanges between Aehrenthal and Goluchowski, 1898–1906,” S. Winters and J. Held (eds.), *Intellectuals and Social Developments in the Habsburg Empire from Maria Theresa to World War I* (New York: Boulder, 1975), pp. 203–240.

⁵¹Fritz Fellner, *Der Dreibund* (Vienna: Verlag für Geschichte und Politik, 1968), p. 68.

⁵²Franckenstein, *Facts and Features*, p. 73; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 82.

⁵³Istvan Diószegi, *Hungarians in the Ballhausplatz: Studies in the Austro-Hungarian Common Foreign Policy* (Budapest: Corvina Kiadó, 1983), pp. 202–203.

⁵⁴*Ibid.*; Bridge, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers*, pp. 228, 233–234.

⁵⁵Diószegi, *Hungarians in the Ballhausplatz*, p. 204.

彼にとって強力かつ建設的な外交と健全な国内情勢とはまさに「コインの両面」を成すものなのであった⁵⁷。彼はロシア大使時代からオーストリアの国際的地位の低さの原因となっている複雑な国内問題を解決するための方策を練っており⁵⁸、先行研究は1908年に推進した積極的な諸々の外交政策が国内の民族問題と深い関係があることを示してきた⁵⁹。つまりエーレンタールという人物は保守的で古式ゆかしい外交官であると同時に、ナショナリズムという近代の要件を十分理解した人物でもあった⁶⁰。

そしてこのエーレンタール男爵こそ、フランケンシュタインをペテルブルクに呼んだ張本人であった。ゲオルクがワシントン滞在中に書いた報告書（1903年）が駐露大使の目にとまったのである⁶¹。フランケンシュタインはエーレンタールに外交官として育てられることになる⁶²。「恩師」と初めて対面した時の印象をゲオルクは次のように書いている。

大使館に到着すると、早速上司（エーレンタール）に呼ばれた。彼が（ロシアの）政治情勢とオーストリア＝ハンガリー帝国の外交政策について解説する間、私は彼をじっくり観察することができた。彼の頭はいつも傾いていたが、それはまるでその中の知識と思考、様々な計画の重みのためのように思われた。彼の目からは疲れが感じられたが、それは読書のし過ぎのためであった。だが微笑むと、その目はまったく茶目っ気のある輝きをみせるのであった。私はこの政治家に対して瞬時に尊敬と敬愛の念を感じるようになった。そして彼はのちに私の父親代わりとなり、私が（外交官としての）経歴を重ねる上で多大の尽力をしてくれることになったのである。[*Franckenstein, Facts and Features*, pp. 42–3; *Idem, Zwischen Wien und London*, p. 60.]

⁵⁶*Ibid.*, p. 204.

⁵⁷Bridge, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers*, p. 268; Wank, “Aehrenthal’s Programme for the Constitutional Transformation of the Habsburg Monarchy: Three Secret Memoirs,” *Slavonic and East European Review*, Vol. VLI, No. 97, (June 1963) p. 522.

⁵⁸Cf. Wank, “Aehrenthal’s Programme,” pp. 514–515, 518; *Idem*; “Varieties of Political Despair,” pp. 203–40.

⁵⁹米フランクリン・マーシャル・カレッジのオーストリア＝ハンガリー外交史研究者のワンクは、1908年のノヴィバザール鉄道事件やボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合をエーレンタールが抱いていた帝国国制改革計画の一部として位置付け、バルカンへの帝国主義的経済進出の一段階であった論じている。これはまさにオーストリア＝ハンガリーの外交政策における「内政優位（*Primat der Innenpolitik*）」を論証するものである。Wank, “Aehrenthal’s Programme”; *Idem*, “Aehrenthal and the Sanjak of Novibazar Railway Project: a Reappraisal,” *Slavonic and East European Review*, Vol. XLII, No. 99 (June 1964), p. 355.

⁶⁰Diószegi, *Hungarians in the Ballhausplatz*, p. 204.

⁶¹この報告書「太平洋と大西洋の結婚」はパナマ運河の開通に伴う国際情勢の変化についてまとめたものであった。Franckenstein, *Facts and Features*, p. 41; *Idem, Zwischen Wien und London*, p. 59.

⁶²エーレンタールは外交官としては駆け出しのゲオルクを重用し、本省宛の重要な報告書の執筆を任せただけであった。Franckenstein, *Facts and Features*, p. 45; *Idem, Zwischen Wien und London*, p. 62.

このようにフランケンシュタインは瞬時に次期外相に対する尊崇の念を抱いた。彼のようないわば「エーレントール・スクール」ともいうべき、世紀転換期に外務省に入省してエーレントールの薫陶を受けた若手の外交官たちには、1914年7月に密使としてドイツの「白紙小切手」を受け取ったアレクザンダー・ホヨシュ伯爵 (Alexander Graf Hoyos, Freiherr zu Stichsenstein: 1876–1937) やオーストリアが1914年「7月危機」で対セルビア開戦を決断する際に重要な役割を演じた外務次官のヨハン (ヤーノシュ) ・フォルガツハ伯爵 (Dr. Johann/Janos Graf Forgách von Ghymes und Gács: 1870–1935), アレクザンダー・ムスリン男爵 (Alexander Freiherr Musulin von Gomirje: 1868–1947) などがいた。オーストリア＝ハンガリー外交史研究者のフリッツ・フェルナーとジョン・レスリーによると、彼ら「エーレントール・スクール」の若手・中堅外交官たちは、「恩師」の強硬な外交思想 (姿勢) や政策だけを受け継ぎ、1914年7月の対セルビア宣戦を積極的に推進したとされる⁶³。見方を変えれば、エーレントールという人物はそれだけ影響力の強い、若者にとって魅力的な人物だったということになる。この「恩師」との出会いは、フランケンシュタインにとって外交官としての人生を決定付けた。

この決定的出会いの他にも、彼はペテルブルクで重要な人間関係を構築した。ペテルブルク大使館の参事官を務めていたレオポルト・ベルヒトルト伯爵 (Leopold Graf Berchtold von und zu Ungarschitz: 1863–1942) とは、すぐに親しい友人関係を築いた⁶⁴。このハンサムで聡明なモラヴィアの大貴族は、エーレントールから厚い信頼を受けており、1912年には彼の指名で外相に就任する。つまりフランケンシュタインはペテルブルクで、2代の外相と親しくなったことになる。もう1人の重要な友人となったのが英国大使のサー・チャールズ・ハーディング (Sir Charles Hardinge: 1858–1944) である。ハーディングはのちに外務次官となって、英露関係緊密化のためにロシアがオーストリアから離反するよう画策した、いわば英国外務省の親露反奥派であった⁶⁵。しかしフランケンシュタインは1913年、東京からの帰りにインドに立ち寄った際、インド総督 (Viceroy) となっていたハーディングに歓待されたこともあり⁶⁶、のちのロンドン時代につながる友人関係を得たと考えたようである⁶⁷。その他、外交官たちの溜まり場のヨットクラブや絢爛豪華な宮廷舞踏会で、アメリカ時代同様、華やかな人間関係を築いていった⁶⁸。

⁶³ゲオルク・フランケンシュタインもアンドリアンと共にこのグループの一員とされている。Leslie, "Österreich-Ungarn vor dem Kriegsausbruch," pp. 662–663; Fellner, "Austria-Hungary," pp. 11–12. (註31も参照のこと.)

⁶⁴Franckenstein, *Facts and Features*, p. 47; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 63.

⁶⁵Cf. M. B. Cooper, "British Policy in the Balkans, 1908–1909," *The Historical Journal*, Vol. 7 (1964); 島田「欧州協調におけるエーレントール初期外交」, 第3章.

⁶⁶Franckenstein, *Facts and Features*, p. 127; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 124.

⁶⁷無論、フランケンシュタインの亡命先も回顧録の出版も英国であることを考えると、ハーディングを「友人」として紹介する「必要性」があったのかもしれないと邪推できる。Franckenstein, *Facts and Features*, p. 51; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 67.

⁶⁸Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 47–51; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 64–67.

しかしペテルブルクの華やかな世界とは対照的に、国内情勢は日に日に悪化していた⁶⁹。嘆願、デモ、ストライキ、叛乱、暗殺は日常的な出来事になっていた。彼はロシアの現実を実感させられる2つの事件に遭遇している。1つは1905年1月19日、あの「血の日曜日」の2日前の皇帝暗殺未遂事件であった⁷⁰。この日ペテルブルク冬宮前の埠頭で、皇帝がネヴァ川を祝福する恒例の儀式が執り行なわれていた。皇帝の他ロマノフ家の面々と聖職者、軍人、宮中の要人たちが氷結したネヴァ川上での儀式に参加していた。皇后や諸国の外交官たちは冬宮の窓越しにその儀式を見物していた。そのとき突然、川の対岸から銃口が火を吹いた。銃弾は氷結した川や宮殿の建物にあたり、奇跡的に誰にも被弾することなく終わった。もう1つは、司法大臣ムラヴィヨフ (N. V. Murav'yov: 1850–1908) の暗殺未遂現場に遭遇したことであった⁷¹。フランケンシュタインはムラヴィヨフ家の娘たちと親しく、客人として同家に度々招かれて司法大臣から直々にロシアの国内情勢について情報を得ていた。あるときムラヴィヨフはフランケンシュタインをコーカサスまでの旅に誘った。この旅は特別列車を仕立てて、各地の牢獄を監察し、司法関係者と懇談することを目的としていた。ある晩のこと、列車が駅を出るや否や、不審な男が窓から頭を入れて銃口を司法大臣に向けた。犯人を取り押えようと飛びかかる前に、犯人が逃げてしまったため、これも未遂で終わった。このように楽天的なフランケンシュタインですら、暗殺未遂事件に2度も遭遇して、帝政ロシアの現実を噛み締めていたのである。

フランケンシュタインのロシア駐在中で、もっとも重要な国際政治上の事件は日露戦争であった。回顧録を書く上での「後知恵」かもしれないが、フランケンシュタインはロシアに赴任する際、車中で日露関係悪化についての記事を読んでいた回想している⁷²。彼が日本を国際政治上の1プレイヤーとして認識するようになるのは、戦争当事国のロシアでこの戦争を観察したことが1つの切っ掛けであったと思われる。オーストリア＝ハンガリーの外交官として、ロシアが「極東」方面に強い関心を持つことは歓迎すべきことであった⁷³。「もしもロシアが極東で戦争し、またその最果ての地で領土を獲得することになれば、バルカン半島で積極政策を遂行しなくなることは明らかであった。これはオーストリア＝ハンガリーの懸念をおおいに軽減する⁷⁴」と考えられていたからである。戦争の結果について、フランケンシュタインがどのように予想していたかは、回顧録には記されていない。日本の「背信的」な旅順攻撃によって始まったこの戦争は、ロシアでは当初、国民的な「十字軍遠征」とみなされていた⁷⁵。戦争に熱狂した国民は一時的に国内情勢に対する不満

⁶⁹Franckenstein, *Facts and Features*, p. 51; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 67.

⁷⁰Franckenstein, *Facts and Features*, p. 52; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 67.

⁷¹Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 55–56; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 70.

⁷²Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 41–42; Idem, *Zwischen Wien und London*, pp. 59–60.

⁷³このあたりの事情は、島田「オーストリア＝ハンガリー外交における日本の位置付け」参照。

⁷⁴Franckenstein, *Facts and Features*, p. 42; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 59.

⁷⁵Franckenstein, *Facts and Features*, p. 53; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 69.

の予先をおさめた。しかし1905年1月、旅順攻囲戦でロシアが降伏し、同年5月にはバルチック艦隊という「アマルダ⁷⁶」も対馬沖海戦で壊滅すると、ロシア国内は悲痛な空気に包まれ、疲弊感が蔓延し、蜂起や革命運動が活発化していった。

フランケンシュタインはペテルブルクで日露戦争を観察していたわけだが、8月のポーツマス条約締結まで、日露交渉をフォローしていたわけではない。8月は例年通り、夏の長期休暇をとってアルトアウスゼーの別荘で過ごしていた。そこで彼は外務省からの予期せぬ通知を受け取ることになった。それは9月早々にローマ大使館に転勤するよう命じる辞令であった。回顧録によると、エーレントール大使は年内一杯フランケンシュタインをペテルブルクに留めておきたかったようだが、ローマ大使館では「深刻な人材不足」が生じていたため、今回の転勤となったということであった⁷⁷。フランケンシュタインは8月24日付のエーレントール宛書簡で、急な異動の知らせに対する驚きと、恩師に直接別れの挨拶をすることがかなわない無念さを伝えた⁷⁸。だが彼にとってローマ転勤は、実は願ってもない幸運であった。ロシアは確かに興味深い国であったが、彼には恩師のようなロシア専門家になる気はなく、むしろ西欧諸国での勤務をずっと望んでいたのだ⁷⁹。恩師はローマ転勤を喜ぶ教え子に次のようなアドヴァイスを贈った。「ローマで君を待ちうけている刺激的な物事に耽溺せず、ペテルブルクでの生活とこの2年の国際情勢の大変動を忘れないでもらいたい。またロシア語を忘れないように忠告しておきたい。ロシア語はオーストリア外交官にとってきわめて重要な言語なのだから⁸⁰。」しかしこれは「恩師からのアドヴァイスで私が従わなかった唯一のこと」になった。ペテルブルクでは恩師と呼べる人に出会ってオーストリア外交の基本路線を学び、もっとも重要なパートナーであるロシアと両国を取り巻く国際情勢について学んだ。まさにフランケンシュタインは外交官としての本当の意味での研修期間をペテルブルクで過ごしたのであった。

(5) ローマ ～しばしの休日～

1905年9月、フランケンシュタインはローマに着任した。彼の「外交官としてのキャリアの幸運な特徴は、各任地の強烈なコントラストであった⁸¹。」ペテルブルクとローマは、雰囲気、気候など様々な点で対照的である。ピョートル大帝によって「200年前（当時）」に建設されたペテルブルクと1000年以上の歴史を持つ「永遠の都」であるローマとの対比が、フランケンシュタインにとってどれほど強烈であったかは、回顧録からも読み取れる。

⁷⁶Franckenstein, *Facts and Features*, p. 54; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 69.

⁷⁷Franckenstein, *Facts and Features*, p. 57; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 71.

⁷⁸Haus-, Hof-, und Staatsarchiv (Vienna, hereafter cited as HHStA), Nachlass Aehrenthal, Karton 5, Franckenstein to Aehrenthal, 24 Aug. 1905.

⁷⁹Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 57–58; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 71.

⁸⁰Franckenstein, *Facts and Features*, p. 58; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 71.

⁸¹Franckenstein, *Facts and Features*, p. 59; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 72.

しかし古都ローマでのフランケンシュタインの生活のリズム自体は、ペテルブルク時代とは特に変わらない。1914年以前の「古き良きヨーロッパ」の外交官の日常生活とは、大使館での地味な業務と華やかな社交の世界とのミクスチャーなのである。

当時の駐イタリア大使はハインリヒ・リュツォウ伯爵⁸²であった。この老練な外交官は本省の外務次官だったとき、フランケンシュタインをアメリカに修行にいかせてくれた人物であった。この英国紳士のような風貌の老外交官の下で、フランケンシュタインは悠々自適のローマ生活を満喫する。当時ローマにはオーストリア＝ハンガリーの大使館が2つあった。1つはイタリア王国駐節使節であり、もう1つがヴァチカン駐節使節であった。フランケンシュタインが属した在イタリア王国大使館は現在、首相官邸として使われているチギ宮殿 (Palazzo Chigi) にあり、在ヴァチカン大使館は1455年に建てられたヴェネツィア宮殿 (Palazzo Venezia) にあった⁸³。回顧録に引用されているセルモネータ公爵夫人 (the Duchess of Sermoneta) の回想によれば、「2つの大使館は社交的な華やかさを友好的に競い合っていた。素晴らしい晩餐会と舞踏会、様々なエンターテイメントが相次いで催され、これらはローマの社交界にとって好ましいものであった。また2つの大使館はそのアタッシェや書記官としてもっとも魅力的な若者たちを確保していた⁸⁴。」フランケンシュタインは当然、自分を「もっとも魅力的な若者」の1人として位置付けていたのだろう。

ロシアとは異なり、オーストリア＝ハンガリーにとってイタリアは正式な同盟国 (三国同盟: Dreibund) であった。しかしながら、両国の関係は決して楽観できるものではなかった。そもそもイタリアが三国同盟に加入したのは、フランスとのアフリカでの植民地獲得競争や、地中海での制海権をめぐる対立においてドイツの支援を期待したからである。旧宗主国とでもいうべきオーストリアとの間には2つの問題が横たわっていた。第1に領土問題があった。オーストリア＝ハンガリーには多数のイタリア系住民がおり、イタリア人のナショナリズムの攻撃対象となっていた。いわゆる失地回復運動である⁸⁵。オーストリア大使館はこのイタリア・イレデンタの動きを観察し、その主張に対し繰り返し反論するという役目を負っていた⁸⁶。第2の問題がバルカン半島をめぐる対立である。イタリアはアフリカでの植民地獲得に行き詰まると、バルカン半島に強い関心を持つようになった。フランケンシュタインはイタリアのバルカン進出政策への転換を象徴することとして、元イタリア外相サン・ジュリアーノ侯爵 (Antonio Marquis di San Giuliano: 1852-1914) の英

⁸²リュツォウには回顧録がある。Heinrich Graf von Lützow, *Im diplomatischen Dienst der k. u. k. Monarchie* (Munich: Ordenbourg, 1971)。なおリュツォウは引退後1911年1月から半年、東アジアを旅している。

⁸³ちなみにヴェネツィア宮殿は、ムツソリーニが執務室を置き、そのバルコニーから演説を行ったことでも有名である。フランケンシュタインはチギ宮殿ではなく、ヴェネツィア宮殿に冬の居を構え、夏をカステロ・ガンドルフォのヴィラ・バルベリーニ (Villa Barbelini) で過ごした。Franckenstein, *Facts and Features*, p. 61; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 73.

⁸⁴Franckenstein, *Facts and Features*, p. 65; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 76.

⁸⁵イレデンティズムの対象は具体的には南ティロルとイストリアであった。

⁸⁶Franckenstein, *Facts and Features*, p. 63; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 75.

国大使就任を挙げている⁸⁷。英仏との協調を重視したサン・ジュリアーノは、英仏の支持の下でマケドニアとアルバニアへの影響力拡大を模索していた。「アドリア海をイタリアの湖⁸⁸」とする試みは当然、オーストリアには容認できるものではなく、ローマの大使館はイタリアのバルカン政策を詳細にフォローすることを任務としていたのである。

イタリアという華やかな任地は、まさに彼が望んだ世界そのもののはずであった。彼は『『永遠の都』だけに恋したわけではなかった⁸⁹。』しかし彼は1年半もしないうちに、この「永遠の都」を去ることを決意した。恩師エーレンタールが外相に就任し（1906年10月）、自ら外相の私設秘書になることを申し出たのである⁹⁰。これは「1人の人間が自らの運命を形作るチャンスを与えられた瞬間であった⁹¹。」

（6）ウィーン ～恩師の下で～

1907年1月、フランケンシュタインは望み通りウィーンの外務省に公使館書記官（Legationssekretär）の資格で勤務することになった。彼にとって初めての本省勤務である。そして彼は少年時代を過ごしたウィーンで、1911年6月に東京赴任が決まるまでの3年半を過ごすことになる。ウィーンに戻るや否やすぐに外務省を訪れたフランケンシュタインは恩師エーレンタールから熱烈に歓迎された⁹²。

エーレンタール外相の外交を時期区分すると、次のようになるだろう。初期はマケドニアの行政改革問題の決着に努力した1906-8年である⁹³。マケドニア改革問題は、新外相にとってロシアとのパートナーシップの試金石であった。1903年の「ミュルツシュテーク綱領」は、マケドニアの行政改革問題についてオーストリアとロシアがいわば列強諸国の「取りまとめ役」としての地位を確保することを定めていた。しかしロシアが英国と接近し、英露協商（1907年）を結ぶに至って、ロシアのオーストリアに対する誠意に信頼を失ったエーレンタールは、1908年2月、サンジャク・ノヴィバザール鉄道の建設予備調査の実施⁹⁴を発表した。つまり初期の対露協調路線から、ロシアに先んじてオーストリアのバルカン権益を確保する積極路線へと転換していったのである。ここからが中期になる。さらにオスマン帝国での青年トルコ党による革命の勃発を理由に、1878年以来占領してきたボスニア＝ヘルツェゴヴィナを正式に併合する⁹⁵。こうしたエーレンタールの積極的な政策

⁸⁷ Franckenstein, *Facts and Features*, p. 64; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 75.

⁸⁸ *Ibid.*

⁸⁹ Franckenstein, *Facts and Features*, p. 67.

⁹⁰ *Ibid.*, p. 67; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 77. 「この重要なポストをこなす上での私の能力の足りない部分は、全力で克服するよう務めます。私の感謝を込めた閣下に対する忠誠と（閣下の）私に対する信頼に対する誇りが支えてくれます。」 HHStA, Nachlass Aehrenthal, Karton 5, Franckenstein to Aehrenthal, 26 Oct. 1906.

⁹¹ Franckenstein, *Facts and Features*, p. 67.

⁹² *Ibid.*, p. 68; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 79.

⁹³ 鳥田「欧州協調におけるエーレンタール初期外交」参照。

⁹⁴ Cf. Wank, “Aehrenthal and the Sanjak of Novibazar Railway Project: a Reappraisal.”

には、華々しい外交的成果により国際的な地位を向上させ、オーストリア＝ハンガリーという枠組の魅力を国内の諸民族にアピールしようという狙いがあった。エーレンタールはボスニア併合を実現したことで、伯爵位を与えられ、国内では英雄として賞賛された。しかしボスニア併合はオーストリアの国際的地位を犠牲にした上での表面的成功であった。エーレンタールはボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合問題が大国間の国際会議で議論されることを徹底的に拒絶して、オスマン帝国と単独で交渉することで解決を目指したのである。エーレンタールの立場からすると、ボスニア併合は「国内問題」であり、列強諸国の関与する問題ではない。しかしながら、19世紀の欧州協調体制（The Concert of Europe）においては欧州内での領土変更については列強諸国の承認が必要とされるというのが、1つの共通認識であった。その意味でエーレンタールの単独行動主義的な強硬姿勢は、単にオーストリアの国際的プレステージを傷つただけではなく、欧州内の国際問題における大国間協調の原則を益々形骸化させ、第1次大戦への道を一步進めることに貢献したと評価することもできる。ボスニア併合に大きく抵抗したのがセルビアであったが、この「後見人⁹⁵」であるロシアと、オーストリアは深刻な対立状態に陥った。またロシアの協商国であるイギリス、同盟国であるフランスとの関係冷却化は避けられなかった。また同盟国ドイツも「ジュニア・パートナー」であるオーストリアの強硬姿勢に無理やり付き合わされ、オーストリアを全面的に支持せざるを得ない状況に追い込まれた。もう1つの同盟国イタリアはオーストリア式の強硬姿勢が通用することを学習し、いわゆるリビア戦争（1911-12年）⁹⁶に突入していく。ボスニア併合という「国内政策」を完遂した後のエーレンタール外交は、完全に現状維持政策と大国間協調路線への復帰を模索する。これが後期である。フランケンシュタインはこのエーレンタール外交の初期の途中から後期の途中までを、恩師の下で直に経験していく。恩師の指導の下、彼は「自分の職業について多くを学び、重要で困難な、そして華々しい成功に彩られた外交に関わったのである⁹⁷。」

フランケンシュタインは外務省の政治部門（Die politischen Referate）の第1課に所属した。当時のオーストリア＝ハンガリー外務省は外務大臣官房（Die Kabinett des Ministers）、

⁹⁵ボスニア危機の概説は以下を参照のこと。Erich Brandenburg, *Von Bismarck zum Weltkrieg: Die deutsche Politik in den Jahrzehnten vor dem Kriege* (Berlin: Deutsche Verlagsgesellschaft für Politik und Geschichte, 1925), Chap. 12; F. R. Bridge, "Izvol'ski, Aehrenthal, and the End of Austro-Russian Entente, 1906-1908," *Mitteilungen des österreichischen Staatsarchivs*, Vol. 29 (1976), pp. 315-362; George P. Gooch, *Before the War: Studies in Diplomacy* (New York: Russel & Russel, 1967: re-issue); Bernadotte Schmitt, *The Annexation of Bosnia 1908-1909* (New York; Howard Fertig, 1970: re-issue).

⁹⁶奥山倫子「ロシアのバルカン政策（1）－「後見人」外交とロシアの国益－」【法学論叢】第127巻5号（1990年8月）、35-61頁。

⁹⁷リビア戦争については、William Askew, *Europe and Italy's acquisition of Libya 1911-1912* (Durham: Duke U. P., 1942); Timothy Childs, *Italo-Turkish Diplomacy and the War over Libya 1911-1912* (Leiden: Brill, 1990); 藤由順子【ハプスブルク・オスマン両帝国の外交交渉1908-1914】（南窓社、2004年）、第5章を参照。

⁹⁸Frænkenstein, *Facts and Features*, p. 69; Idem, *Zwischen Wien und London*, p. 80.

政治部門および行政部門 (Die administrativen Departments) からなり、政治部門と行政部門は第2次官 (Zweiter Sektionschef) が統轄していた。政治部門の第1課 (Referat I) はロシア、バルカン、アジア方面担当を管轄していた。ロシアとバルカン半島はオーストリア外交にとってもっとも重要な地域である。フランケンシュタインがこの部署に配属されたということは、彼がいわば外務省のメインストリームに属したことを意味した。当時の第2次官は後に東京駐箚大使となるラディスラウス・ミュラー男爵 (Ladislaus Freiherr Müller von Szentgyörgy: 1855-?) であり、上司にあたる第1課長はルドルフ・ポガチャー (Rudolph Pogatscher: 1859-1937) で、その次席はムスリン男爵であった。フランケンシュタインが外務大臣官房に異動する1909年秋までの間、オーストリアはマケドニア改革問題、サンジャク鉄道問題、そしてボスニア併合問題を経験した。第1課はまさにこれらの問題に正面から対峙したセクションであった。だが、回顧録にはこの重要な時期に彼が具体的にどのような仕事をしてきたのかについて記されていない。彼は上司ムスリンの回顧録⁹⁹や外交文書に残されたエーレンタールの情勢分析を引用しただけである。これは同時期にエーレンタールに本省に呼び戻されたコンスタンティン・ドゥンバ (Constantin Dumba: 1856-1947) の回顧録¹⁰⁰と対照的である。というのもドゥンバは回顧録に具体的な仕事について記しているからである。フランケンシュタインがウィーン時代の仕事に関して書いていることは、同僚21人を抜いて1908年7月に宮廷・外務省書記官 (Hof- und Ministerialsekretär) の職位を手に入れたことである。エーレンタール外相が「私の仕事を認めてくれた¹⁰¹」がゆえの人事であった。また恩師の体調がすぐれなくなると、その長期休暇にも同行するようになり、「当然、彼の仕事の多くを手伝¹⁰²」った。長期休暇中は、多くの客人がエーレンタールのもとを訪れたため、その会談の記録をとり、各地の大使への私信の下書きを書く作業はフランケンシュタインが担当した。彼は「エーレンタールとその夫人、子供たちと家族の1人として過ごした¹⁰³」のである。その他、ウィーン時代の出来事として描かれているのは、1908年のフランツ・ヨーゼフ帝即位50周年を記念する行列にマクシミリアン1世の役で「出演」したことや¹⁰⁴、従姉妹のイルマ・フルステンベルク (Irma Fürstenberg) 公爵夫人の招きで、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世と狩りに出かけた話¹⁰⁵だけである。

⁹⁹Alexander Freiherr von Musulin, *Das Haus am Ballplatz: Erinnerungen eines österreichisch-ungarischen Diplomaten* (Munich: Verlag für Kulturpolitik, 1924), pp. 156-159が引用されている。

¹⁰⁰Constantin Dumba, *Memoirs of a Diplomat* (Boston: Little Brown, 1932), Chap 6.

¹⁰¹Franckenstein, *Facts and Features*, p. 84. なお註101-105のエピソードは独語版には収められていない。

¹⁰²*Ibid.*, p. 87.

¹⁰³*Ibid.*, p. 87. 公刊されているエーレンタール家書簡集には、回顧録の通り、エーレンタール家と共に旅行するフランケンシュタインのことが書かれたエーレンタール夫人の書簡が収められている。Paula Aehrenthal to her husband's mother, 12. Jan. 1911, Franz Adlgasser (ed.), *Die Aehrenthals: Eine Familie in ihrer Korrespondenz 1872-1911* Vol. 2 (Vienna: Böhlau, 2002), p. 976.

¹⁰⁴Franckenstein, *Facts and Features*, pp. 83-84.

¹⁰⁵*Ibid.*, pp. 84-87.

そこで史料の中から、フランケンシュタインと次の任地の東京を結びつける事例を拾ってみたい。1909年から1910年にかけて、日本の皇族が立て続けにウィーンを訪問した。1910年4月の伏見宮の訪問の際、同妃の世話をしたのはフランケンシュタインであった¹⁰⁶。だが重要なのは1909年1月の久邇宮と5月の梨本宮の訪問で、これはあまり知られていない外交史上の1つのトピックに関わっている。それは1909年5月末の各国新聞紙上を賑わせた「日墺同盟ノ風説」である。これは当時、ボスニア併合問題でロシアやセルビアと一触即発状態だったオーストリアが、日本と軍事協定を結んでロシアを封じこめようとしている、という内容であった¹⁰⁷。だが、この一見したところ奇想天外なこの「風説」は、オーストリアの文書館史料を紐解いてみると、ただの風説では済まされないものであることが分かる。オーストリア外務省は1909年1月、新任の東京駐劄大使グイド・カル男爵 (Guido Freiherr von Call zu Rosenburg und Culmbach: 1849–1927) に対して、独墺同盟とロシアが開戦した場合、日本に独墺側につくよう説得を試みる極秘指令を出していたからである¹⁰⁸。オーストリア外務省は日露戦争後も日露対立が東アジア国際関係の基調であり、日本は英国との同盟関係 (1902年) にも不満を持っていると分析していた。だが現実には日露はむしろ満州権益をめぐって協調関係を構築し始めていた。東アジアの国際関係に精通していた東京大使館の参事官ユリウス・シラシ (Julius Szilassy von Szilas und Pilis: 1870–?) がカル大使にこの指令に従わないようアドヴァイスしたため、これは計画だけで終わった¹⁰⁹。もし仮にこれが実行に移されていたら、日本はすぐにこの一件を英国に通報して、オーストリアの国際的立場は益々悪くなっていただろう。この「日墺同盟ノ風説」の大元になった手書き15頁にわたる指令第120号を起草したのは、フランケンシュタインが属していた政治部門の第1課であった。そしてこの120号の内容を極秘にドイツ帝国宰相ビューロー侯爵 (Bernhard Fürst von Bülow) に伝えるよう駐独大使に命じる指令を書いたのは、筆跡からフランケンシュタインであったことが確認できる¹¹⁰。この計画と、そこから生まれた「風説」はオーストリア外務省によって対ロシア政策の一環でしばらく利用されることになる。このエピソードは当時のオーストリア=ハンガリー外交の考え方と、彼らにとっての日本の位置付けを教えてくれる。つまりロシアをオーストリアと日本で挟み込むというビリヤードゲーム的な国際政治の理解の仕方と、日本についてのご都合主義的な理解である。日本はあくまでも対露政策のための道具に過ぎないのである。これは当

¹⁰⁶外務省外交史料館「外務省記録」, 「外国人叙勲雑件 (墺洪国人之部)」第6巻 [6.2.1.5–9], 奥田発小村宛, 墺公第38号 (明治43年4月21日)。

¹⁰⁷詳しくは鳥田「オーストリア=ハンガリー外交における日本の位置付け」を参照のこと。

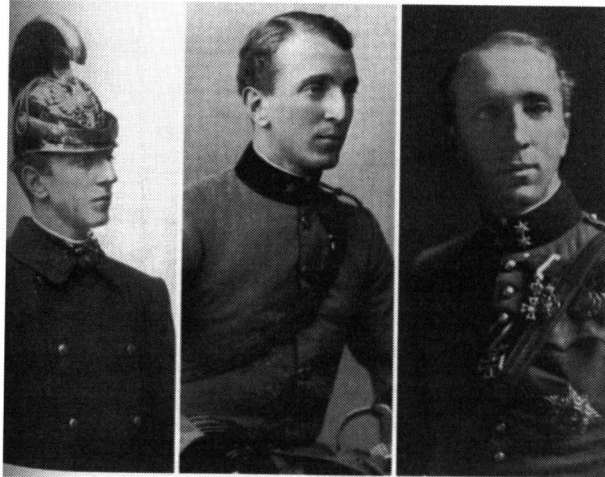
¹⁰⁸HHStA, Politisches Archiv [PA] I, Karton 487, Liasse XL: Varia 1907–1909, Nr. 120: Aehrenthal to Call (Geheim), 12. Jan. 1909; Ludwig Bittner, Alfred Pribram, Heinrich Srbik and Hans Uebersberger (eds.), *Österreich-Ungarns Aussenpolitik von der bosnischen Krise 1908 bis zum Kriegsausbruch 1914* [ÖUA], No. 883.

¹⁰⁹Julius von Szilassy, *Die Untergang der Donaumonarchie* (Berlin: Verlag Neues Vaterland, 1921), p. 166.

¹¹⁰HHStA, PA I, Karton 487, No. 161, Aehrenthal to Szögyeny, 14 Jan. 1909 (hand written); Also found in HHStA, Botschaftsarchiv Berlin, K. 173 (typed).

時のオーストリアにとっての日本の位置付けがあまり高くなかったことを示している。思い出してみれば、日露戦争のときもオーストリアにとって日本は単に有難い存在であった。そしてこうした日本観は、日露戦争後もおそらくウィーンの外交政策決定者たちに共有されていたのであろう。そしてそうした日本観をもった外交官の1人であったフランケンシュタインが、1911年6月、東京への赴任を命じられることになるのである。(次号に続く)

【参考写真】



フランケンシュタインのポートレイト。左から1897年，1901年，第1次大戦時。

Georg von Franckenstein, *Zwischen Wien und London: Erinnerungen eines österreichischen Diplomaten* (Graz: Leopold Stocker, 2005).



「恩師」アロイス・エーレンタール外相

<http://www.geocities.com/veldes1/aehrental.html> (アクセス日：2006年3月)